



この人を たずねて

京都大学防災研究所巨大災害研究センター
教授・センター長

矢守克也氏

インタビュー
河越隼人



Profile — やもり かつや

ヨハネスケプラー大学客員教授、ウィーン環境大学客員研究員などを経て現職。人と防災未来センター上級研究員、語り部KOBÉ1995顧問、大規模災害対策研究機構理事などを兼任。専門は社会心理学、防災心理学。主な著書は『アクションリサーチ』（単著、新曜社）、『防災人間科学』（単著、東京大学出版会）、『「生活防災」のすすめ』（単著、ナカニシヤ出版）など。

■ 矢守先生へのインタビュー

—先生の研究テーマをお聞かせ
ねがえますか。

私の現在の研究テーマは、防災のための心理学です。防災心理学というのは、大きく分けると、災害の前、最中、後の三つの段階にアプローチしていきます。災害の前（事前）では、防災教育や災害リスク認知といった、これから来るであろう災害に対する人々の意識を扱います。災害の最中（事中）では、群集行動や風評被害といった、社会が混乱に陥っている中で人々がどのようなレスポンスを取るのかを研究します。災害の後（事後）では、被災者のこころや地域社会の復興を扱います。私はこの三つの柱に沿って防災心理学の研究に取り組んでいます。

—具体的にはどのような研究に
取り組んでおられるのですか。

私は、研究者と災害を経験した当事者とが共同して取り組む実践である、「アクションリサーチ」という姿勢を大切にしています。

これは、現場での当事者の悩みや問題、課題といったものを解決しながら科学していくという立場になりますので、私はほとんど研究室にはいません（笑）。

活動の例を挙げると、私は阪神・淡路大震災が生じた後から、「語り部KOBÉ1995」という団体に所属し、実践をしながらの研究に取り組んできました。語り部の活動というのは、自分たちの経験を語り、他の地域や他の世代に、次に来るかもしれない災害に役立ててほしいという気持ちから成り立っています。つまり、語り部の方々が活動を通じてどのような回復プロセスを辿るのかという災害の事後に関する研究と、語り部の方々の経験が防災とどのように結びついていくのかという災害の事前に関する研究を実践の中で行ってきたわけです。

別の活動を挙げてみましょう。私は以前、「クロスロード」というゲーム型の防災教育教材を作成しましたが、これは阪神・淡路大震災の神戸市職員の方々の経験を

もとに作成しています。たとえば、「ここには1000人の避難者がいますが、食料は500人分しかありません。あなたは配りますか？ YES or NO」というような形式になっています。つまり、災害時に第一線で活動されていた方々の実際の悩みを問題にし、災害に出会う可能性のある人たちにプレイしてもらおうのです。このゲームには正解がないことが特徴で、実話に基づいた正解のない問題を、今度は災害の事前の段階にいる人たちに考えてもらい、防災に役立てていくことを目的としているわけです。

昨今の心理学は自然科学的なアプローチを取ることが多いように思いますが、私は実践に即したアクションリサーチのような視点も重要だと思います。心理学の研究者には両方のチャレンジを大切にしてもらいたいですね。

—災害と聞くとやはり東日本大震災のことが思い起こされます。先生はどのような活動に取り組まれているのでしょうか。

私は、日本災害救援ボランティアネットワークという団体に所属しており、東日本大震災が起こってからはすぐに東北の支援へ向かいました。その中で、インターローカリティ（地域をつなぐ）という活動をしてきました。具体的には、岩手県の野田村と高知県の四万十町、そして神戸をつなぐということに焦点を当てています。この三つの地域の震災経験を時間軸に当てはめていくと、神戸が事後（これは相対的な意味でのみ言えることですが）、野田村が事中、四万十町が事前ということになります。

この活動は、国全体としての災害体験の社会的風化を防ぎ、記憶を保持して、次に備えるということを目的としています。たとえば、

阪神・淡路大震災を経験した人たちは、いずれいなくなります。しかし、その経験を東北に伝えることで、東北の復興に役立つことはもちろん、神戸の人たちも自らの経験を再構成し、記憶の風化を防げるのです。また、今の神戸に住んでいる子どもたちは自らが阪神・淡路大震災を経験したわけではありませんが、東北の子どもたちと交流を持つことで、自分の地であつて起こった震災に目を向けるきっかけにもなります。つまり、インターローカリティというのは、インタージェネレーションリティ（時代、世代をつなぐ）と言い換えることもできます。今までの経験で培った記憶を、異なる世代や地域に引き継ぎ、社会的風化を防ぎ、次の災害の防災・減災につないでいくことが大切だと思います。

——最後に、心理学を研究する方々へ何かメッセージを。

心理学は、今この瞬間というような、短い時間を研究対象とすることが多いように思います。発達心理学が対象とするような人間の生涯の問題を含めても、100年ほどが心理学の守備範囲でしょう。しかし、災害というのは、人間の持っているタイムスケールとずいぶん違います。東日本大震災のような規模の震災は、おそらく1000年周期くらいのものでしょう。放射性物質の問題に関していえば、セシウム(137)の有毒性が半減されるまでに30年、プルトニウム(239)でいうと2万年以上といわれています。人間は災害と共に生きています。そういったものの多くは、数千年や数万年間隔で起きる事象であり、われわれはそういったものと共存しているわけです。心理学もそろそろ、そういった長い時間展望を持つ必要があるように思います。長いタ

イムスケールで見つめることで、新たに見えてくるものもあるはずです。長い時間をかけてじっくりとヒトを理解してもらいたいですね。

■インタビューの自己紹介

防災の専門家と出会ってみて

今回、矢守先生にお会いしたことで、自分の研究姿勢について考えてみるが多くなったように思います。心理学者（だけではないでしょうが）は、「研究から発見した知見をどのように実践へ応用するのか」という問いをよく耳にするとおもいます。私自身もその問いに思い悩むことがあります。

しかし、アクションリサーチという実践科学的な姿勢を大切にしておられることもあり、矢守先生からはそのような疑問は感じられませんでした。防災に関する研究というのは、命に直接かかわってくるものだと思います。そのような領域に身を投じてこられた先生だからこそ、常に実践と共にある研究をなさってきたのだと感じました。「何を研究するのか」というだけでなく、「どのように研究するのか」という研究姿勢の大切さを再認識させていただける出会いだったように思います。心理学の強みの一つでもある実践に即したアプローチを自らの研究にも取り入れ、新たな世界を発見しに、私も実験室から飛び出してみましようか（笑）。

現在、関心を持って取り組んでいる研究テーマ

私は、カウンセリング技法の有

効性とその習得方法に関心を持って研究を進めています。近年では、数多く存在するカウンセリングの理論が統合に向かい、技法は折衷的に用いられる傾向にあります。このような潮流の支柱となりうるものとして、マイクロカウンセリングが挙げられます。マイクロカウンセリングは、カウンセリングに必要な技法はあらゆる学派や流派を超えて共通しているとの信念に基づいて開発された、カウンセラー養成のための訓練プログラムです。私は、このマイクロカウンセリングで扱われる技法の有効性や、その訓練プログラムをさらに発展させるための研究に取り組んでいます。

また、昨今ではカウンセリングという言葉をいたるところで耳にするようになり、その理論や技法は、教育、医療、福祉、産業、司法といった様々な領域で用いられるようになりました。研修会などに参加すると、企業の管理職や看護師の方々と会うことも多く、カウンセリングのニーズが高まっているのを感じます。私自身も、弁護士の方を対象にカウンセリング技法の有効性を検討したことがあり、それを活用できる領域の拡大にも関心を持っています。カウンセリングに共通したエッセンスを抽出し、体系化していくことで、多様な領域においてそれが活かされていくのではないのでしょうか。私の研究もその一助となるよう、日々研鑽に努めてまいります。



Profile — かわごし はやと

2009年、帝塚山大学大学院人文科学研究科臨床社会心理学専攻修士課程修了。2012年、同志社大学大学院心理学研究科博士課程修了。博士（心理学）。現在は、同志社大学心理学部特任助手。専門はカウンセリング心理学、臨床心理学。論文は「基礎的なカウンセリング技法の習得を促進するモデリングと言語」（共著、心理学研究第82巻第5号収載）など。